



👁️👁️ みどころ

映画は作り物だから、作り手の視点によっていかような展開も可能。パク・チャヌク監督の『お嬢さん』(16年)は、3つの視点から描かれていた。

しかして、本作は同じ登場人物で同じ設定ながら、前半と後半、ちょっとしたタイミングによって2人の男女の出会いから結末までが全く違う展開になっていくのがミソ。はじめて女優キム・ミニとタッグを組んだホン・サンス監督のアイデアだが、それが大成功!

舞台を少しずつ変えた上での会話劇だから、安上がりの映画だが、韓国の寒さやタバコを1本吸うタイミングの面白さ等を含めて、人間観察や恋愛観察のテキストとしてベスト!

恋愛は面倒!と避けている今ドキの若者は、キム・ミニとの不倫を公言したホン・サンス監督を見習って、堂々と恋愛宣言をしてみてもいい。



■□■ホン・サンス監督×女優キム・ミニの第3弾を鑑賞■□■

4月27日に観たホン・サンス監督×キム・ミニの第1弾『それから』(17年)、6月26日に観た第2弾『夜の浜辺でひとり』に続いて、第3弾である『正しい日 間違えた日』を鑑賞。これは、シネ・リーブル梅田がホン・サンス監督×キム・ミニ特集として、『それから』、『夜の浜辺でひとり』、『正しい日 間違えた日』、『クレアのカメラ』の4作を連続で上映しているためだが、そこまでの特集を組むのは異例。

それは、『クレアのカメラ』は第70回カンヌ国際映画祭アウト・オブ・コンペティション部門への出品、『それから』は第70回カンヌ国際映画祭コンペティション部門への正式

出品だけだったが、『夜の浜辺でひとり』は第67回ベルリン国際映画祭でキム・ミニが主演女優賞（銀熊賞）を受賞、『正しい日 間違えた日』は第68回ロカルノ国際映画祭で金豹賞（グランプリ）&主演男優賞をW受賞と、素晴らしい評価を得ているためだ。私の採点では『それから』は星5つ、『夜の浜辺でひとり』は星4つだったが、さて本作は？

■□■タイトルの意味は？ “なるほど” のアイデアに感服！ ■□■

本作の邦題は『正しい日 間違えた日』だが、英題は『Right Now, Wrong Then』。この英題は、『今は正しく、あのときは間違い』という意味だ。ところが、スクリーン上で示される本作前半の字幕が『あの時は正しく 今は間違い』、後半の字幕が『今は正しく あの時は間違いだった』だから、この英題は不十分・・・？まあ、どちらにしても本作のタイトルの意味はよくわからないということだ。ホン・サンス監督が女優キム・ミニとタッグを組んだのは本作がはじめてだが、それが契機となって2人は不倫関係に入り、後にはそれを公言したばかりか、その後『クリアのカメラ』『夜の浜辺でひとり』『それから』と立て続けにタッグを組んで映画を作っていったわけだ。

私はパク・チャヌク監督の『お嬢さん』（16年）ではじめて女優キム・ミニをじっくり鑑賞したが、そこでは読書会でマルキド・サド的な物語を朗読する美女に扮したキム・ミニの小悪魔的魅力が充満していたし、その役割も謎に満ちていた（『シネマ 39』189頁）。それに比べると、1日早く水原（スウォン）にやってきた映画監督のハム・チュンス（ジョン・ジェヨン）と、地元に住んでいる魅力的な女性ヒジョン（キム・ミニ）との出会いを描く本作のストーリーはきわめて単純（？）で、舞台も数か所のみ、登場人物も数人のみだ。しかし、本作でホン・サンス監督が見せた面白いアイデアは、この男女の出会いをタイミングの違いによって2通りに分けて描き、結末も全く異なるものに導いていったことだ。そのため、スクリーン上には前半は『あの時は正しく 今は間違い』の字幕が、後半は『今は正しく あの時は間違いだった』の字幕が登場する。そして、タイトルも、邦題は『正しい日 間違えた日』、英題は『Right Now, Wrong Then』とされているわけだ。

ちなみに、よく考えてみると『お嬢さん』も「事実」を順次描いていくのではなく、「1つの事実」を第1部＝「スッキと藤原伯爵の視点」、第2部＝「秀子と藤原伯爵の視点」、第3部＝「スッキと秀子の視点」から描く構成になっていた。このように「視点」を分けて「分析」されると、真実を見抜くのがいかに大変かを再認識できたから、パク・チャヌク監督の映画づくりの構想力と騙しのテクニックに脱帽したものだ。しかして、本作でも、ホン・サンス監督のそのアイデアに感服！

■□■あちらは主演女優賞！こちらは主演男優賞！ ■□■

前述のように『夜の浜辺でひとり』はキム・ミニに第67回ベルリン国際映画祭主演女優賞（銀熊賞）をもたらしたが、本作は第68回ロカルノ国際映画祭の金豹賞（グランプリ）

り)の他、チョン・ジェヨンが主演男優賞を受賞!

映画監督といえば、どうしても黒澤明監督のような強いリーダーシップを持ったカリスマ的イメージが強い。韓国でもキム・ギドク監督はトコトン“オレ流”だし、ポン・ジュノ監督やパク・チャヌク監督はきっと黒澤明監督タイプだろう。ところが、本作にみるハム・チュンス監督の頼りなさときたら・・・?『夜の浜辺でひとり』のラストに登場してくる監督を見ても、ホントにこんな男が監督として現場をリードしていけるの?と思ったが、本作を観ていると、その思いがよけいに強くなる。本作パンフレットのイントロダクションには「ダメ男チュンスを、女好きだけれど女ったらしではない、不思議と憎めないキャラクターとして演じてみせ、第68回ロカルノ国際映画祭主演男優賞に輝いた。」と書かれているが、まさにその通りだ。

本作を観ていると、全編を通じて韓国が日本よりよほど寒いことがよくわかるし、レストランやカフェが“屋内禁煙”になっていることがよくわかる。そのため、愛煙家であるチュンスもヒジョンもタバコを吸うためには、いちいち会話を中断して外に出なければならぬわけだが、全編会話劇の本作を観ていると、ちょっとした会話のスキ間をもたせるのに「ちょっとタバコを1本」、という“喫煙タイム”がうまく機能していることがよくわかって面白い。また、「タバコを1本下さい」とか、「ちょっとタバコの火を貸して下さい」という会話は今の日本ではほとんど死語になってしまったが、本作では記者の女性ヨム・ボラ(コ・アソン)との間の会話がそれで成立しているから、そこにも注目!

ホン・サンス監督が黒澤明監督タイプなのか、それともハム・チュンス監督タイプなのかは知らないが、私の予想ではきっとハム・チュンス監督タイプ・・・?そうだからこそ、きっとチョン・ジェヨンに主演男優賞をもたらす、本作のような演出ができたのだろう。

■□■きっかけは?モーシヨンのかけ方は?その後の展開は?■□■

本作の舞台になっている水原(スウォン)が韓国のどこにある都市なのか知らないが、予定より1日早く到着してしまったため訪れた観光名所の某寺でチュンスが、チュンスと同じく1人でそこを訪れていたヒジョンと出会ったのはラッキー。『ロミオとジュリエット』や『タイタニック』等で描かれている男女の出会い、いかにも劇的かつ運命的だが、本作冒頭に見る2人の出会いにはまったくそんな気配はなく、気まずさときちなさが目立つ。これはひとえに、チュンスのヒジョンに対する声のかけ方、モーシヨンのかけ方が下手クソなためだが、そこでのチュンスの唯一のセールスポイントは映画監督だということ。もともと、それはチュンスが映画監督としてそれなりに有名で、ヒジョンがその作品を何本か観ていることが前提だが、さて・・・?

他方、本来ならそこで少しだけ話をして別れるところだが、その後、2人で喫茶店に入ってコーヒーを飲んだり、地元に住んで絵を描いているというヒジョンのアトリエを訪れることになったのは、チュンスにとってはかなりラッキー。よくぞそこまでヒジョンとの

会話を繋げてきたものだとは評価できる。その後、さらに2人だけで寿司屋に入り、料理をつまみながら焼酎を飲む段階になると、こりゃひよっとして……。チュンスはきっとそんな期待を持ちながら、熱く人生についての議論を進めていたに違いないが、さて、その展開は？

私が、本作を鑑賞した後でもよくわからないのは、そんな会話の最中にタバコを1本吸うためちょっと外に出ていたチュンスに対して、ヒジョンが「大切な用事を忘れていた。今日は先輩の集まるカフェに行かなければならない」と言い始めたこと。一瞬、こりゃ体のいい「別れの言葉」と私のみならずチュンスも思ったはずだが、続けて「監督も一緒に行きましょう」と誘ってくれたから、さあ、どうしよう？この誘いを真に受けていいの？それとも……。？ちなみに、京都では「ぶぶ漬けは、いかがですか？」と聞かれたら、それは「そろそろ帰ってくださいな」という意味だから、要注意！そう聞かれて、「それなら、ちょっとだけ」と答え、居座ってしまおうものなら、台所で「厚かましおすな」「常識がおへん」と言われたい放題になってしまうことに……。そこらの判断が難しいが、チュンスとヒジョンは今日がはじめての出会いだから、なおさらだ。結局、チュンスはヒジョンの“お言葉に甘えて”について行ったが、さあ、先輩のパン・スヨン（チェ・ファジョン）たちと共に焼酎をタップリ飲んでしまった、その席では……？

■□■本作から何を学ぶ？男と女の恋愛のあり方は？■□■

本作に見る映画監督のチュンスが何歳かはわからないが、30歳代ではなく40歳代であることは明らかだ。また、その歳で独身なのか結婚しているのかもわからないが、それはあえてチュンスが隠していたため？

本作前半のストーリーでは、チュンスの映画のことをよく知っているというヒジョンの先輩の1人は、チュンスがヒジョンの絵について語っていた言葉について「その話は以前監督のインタビュー記事で読んだことがありますね」と、いらざることを喋り出したし、もう1人の先輩は「監督は女性遍歴が派手なことでも有名ですよ」と言い出したから、こりゃ最悪。たちまち、ヒジョンの顔が曇り、黙りこくってしまったのは仕方ない。もっとも同じ舞台でも、後半のストーリーでは、ヒジョンが席を外している間に、焼酎の入った2人の先輩とチュンスとの間の会話は大いに盛り上がり、チュンスは素っ裸になってしまうという醜態を演じてしまうものの、後にその話をチュンスの口から打ち明けられると、そこからチュンスの隠れた魅力が引き出されることになるから、面白いものだ。なるほど、会話の展開も、酔った勢いで“裸踊り”も、そして、その反省も、タイミングによっていかようにも変わっていくわけだ。

本作ではチュンスのダメ男ぶりは一貫している。同性の私にはそんな男は何の魅力もないが、ヒジョンの方は良くも悪くも感情と表情の変化が豊かで、彼女の気分によってチュンスへの対応が大きく変わっていくのがよくわかる。その結果、『あの時は正しく 今は間

違い』と表示される前半では、飲んだ翌日ヒジョンは明らかに不機嫌で、チュンスとヒジョンとの出会いは終わりを告げてしまうが、『今は正しく あの時は間違いだった』と表示される後半では・・・？なるほど、これが男女の恋愛におけるタイミングの妙というものだ。

ちなみに、近時の若い人たちは恋愛に対する面倒臭さと結婚後に対する不安のため、恋愛に臆病になっているようだが、本作は、そんな人たちへの“恋愛の指南本”としてお薦めだ。チュンスのようなダメ男でも、タイミングによってはヒジョンのような魅力的な女性をゲットできる可能性があることがわかれば、あなたも勇気をもらえるのでは・・・？さらに、あなたもキム・ミニとの不倫を公言したホン・サンス監督を見習って、堂々と恋愛宣言をしてみたら・・・？

2018（平成30）年7月13日記